

W-2

ワークショップ「世界の言語の示差的項標示：要因と機能に注目して」*

鈴木 唯

東京外国語大学・日本学術振興会特別研究員 PD

suzuki.yui.s.y@gmail.com

諸隈 夕子

国立国語研究所・日本学術振興会特別研究員 PD

y.ukumari322@gmail.com

企画者: 鈴木唯、諸隈夕子

司会者: 鈴木唯

コメンテーター: 諸隈夕子

発表者: 石川さくら、周杜海、長屋尚典、林真衣、吉田樹生

【ワークショップの構成】

[a] 企画趣旨の説明: DAM 研究の概略解説・ワークショップの趣旨説明 (鈴木唯)

[b] 研究発表:

- ・ 第1発表: 「タガログ語の示差的目的語標示」(長屋尚典・林真衣)
- ・ 第2発表: 「ガレ語の示差的 A 標示」(吉田樹生)
- ・ 第3発表: 「ティディム・チン語の示差的 A 標示」(周杜海)
- ・ 第4発表: 「ベンガル語の示差的受領者項標示」(石川さくら)

[c] まとめと全体討論: 論点のまとめを行い、それに対して会場からの質疑応答 (諸隈夕子)

【企画趣旨】

示差的項標示 (differential argument marking; DAM) とは、主語や目的語といった特定の種類の項を標示する手段が、その項の有生性や定性などの意味的特性や語用論的特性のほか、動詞の他動性、テンス、アスペクト等の事象の特性に応じて交替する現象の総称である (Witzlack-Makarevich & Seržant 2018)。従来の研究においては、目的語の示差的標示 (示差的目的語標示: differential object marking, DOM) と主語の示差的標示 (示差的主語標示: differential subject marking, DSM) が中心的な分析対象となっていた。近年ではさらに、受領者項など目的語や主語にとどまらない項における DAM も注目を集めつつある。DAM は系統や地域を超えた数多くの言語で報告されている。しかし、どのような項に、どのような条件で、どのような形でこの現象が起きるかは言語によって様々である。このような現象の普遍性と多様性ゆえに、DAM は言語の類型を探る上で広く注目される現象である。

このような背景から、本ワークショップでは以下の3つの論点に着目し、3つの語族から4つの言語の DAM の事例とその要因の分析を提示する。具体的には、タガログ語 (オーストロネシア語族)、ガレ語 (チベット・ビルマ諸語)、ティディム・チン語 (チベット・ビルマ諸語)、ベンガル語 (インド・ヨーロッパ語族) の事例を発表する。本ワークショップでは DAM 研究の中心となっている対格型言語の DOM に加え、能格型言語における示差的 A 標示、受領者項の示差的標示 (differential recipient marking; DRM) も交えて論じる。

* 本研究は JSPS 科研費 24KJ1004 (代表: 鈴木唯) および 23KJ2153 (代表: 諸隈夕子) の助成を受けたものである。

[論点 1: 言語個別の DAM 記述] それぞれの言語において、どの項に、どのような要因で、どのような項標示の交替が起きるのか。

[論点 2: 各言語の DAM の類型論的特徴] 論点 1 で見たそれぞれの DAM に、どのような類型論的特徴を見いだせるか。

[論点 3: DAM 研究における理論的課題] 論点 1 および論点 2 は、DAM 研究においてどのような理論的示唆や課題を与えるか。

各発表の要点は以下の通り:

- ・ **第 1 発表『タガログ語の示差的目的語標示』(長屋・林):** タガログ語では、体言化節において DOM が見られる。具体的には、行為者ヴォイス動詞の P 項の格標示が属格または場所格で交替する。本研究では、コーパスデータを用いて分析することによって、このタガログ語の DOM を引き起こす要因を調査する。その結果から、タガログ語の DOM は、有生性と修飾表現の有無とタイプ (形容詞句や所有者を表す名詞句など) という P 項の特性、動作主性とアスペクトという事象の特性を要因として項標示が交替する複合的な現象であることを指摘する。
- ・ **第 2 発表『ガレ語の示差的 A 標示』(吉田):** 本発表はガレ語の示差的 A 標示を記述し、その類型論的位置付けや地域的特徴を議論する。まず聞き取り調査に基づいたデータから、アスペクト、有生性、受影性、情報構造が A 標示の有無を条件づけることを述べる。このデータに基づき、ガレ語の示差的 A 標示に関わる要因は様々なタイプに属すること、ガレ語の示差的 A 標示は分裂・流動タイプの DAM であること、ガレ語の示差的 A 標示は場合によって弁別機能と同定機能のどちらも担いうること、ヒマラヤ地域において常に A 項にのみ能格標示が現れるのはガレ語の特徴であることを議論する。
- ・ **第 3 発表『ティディム・チン語における示差的 A 標示』(周):** ティディム・チン語は主にミャンマー連邦共和国とインド共和国において話されているチベット・ビルマ諸語である。ティディム・チン語の他動詞節の主語 (A) は能格、目的語 (O) および自動詞節の主語 (S) は絶対格によって標示される。しかし、A の能格標識は有生性・受影性・意志性によって選択的になる場合があることを本研究が記述する。さらに、この 3 つのパラメータは他動性によって統合できることを議論する。つまり、他動性の高い節では、能格標識が義務的になる場合が多く、他動性の低い節では、能格標識が選択的になる場合が多い。
- ・ **第 4 発表『ベンガル語の示差的受領者項標示』(石川):** 本発表はコーパスを用いてベンガル語の示差的受領者標示 (DRM) を調査し、分析を行う。ベンガル語の受領者 (R) 標示は有生性に依ることが知られているものの、反例が存在する上に、量的調査に基づく実証的な研究もなされていない。そこで、本稿はコーパスを用いた調査を通して、ベンガル語の DRM には以下の特徴 3 点があることを主張する。(i) 有生性による分裂システムに加え、無生物 R の場合に流動システムを持つ。(ii) 有生性に加え、人称と指示性による階層にしたがって標示が交替する。(iii) 節内の項を区別する弁別機能ではなく、項が動詞に対して持つ意味的な特徴を示す同定機能として働いている。

参考文献

- Witzlack-Makarevich, Alena & Ilja A. Seržant. 2018. Differential argument marking: Patterns of variation. In Ilja A. Seržant & Alena Witzlack-Makarevich (eds.), *Diachrony of differential argument marking* (Studies in Diversity Linguistics 19), 1–40. Berlin: Language Science Press.